「思いやり」を繋ぐ税

沖縄県立八重山高等学校　　一年　仲辻（ナカツジ）　杜宇子（トウコ）

「夏休みの宿題は、『税に関する作文』です。」
先生からの指示があった時、私は漠然とした。普段の税との関わりといえば、商品を買うと課せられる消費税くらいしか思い当たらない。また、大人になったら納める所得税、住んでいる地域に払う住民税、タバコ税、酒税…。どれも「納めさせられる」というマイナスなイメージだ。あまりに税との関わりが薄いと感じていた私に母が言った。
「病気の時、お世話になったやろ。」
　それは、私が小学一年生の頃抱えていた病気についてだった。激しい運動をすると異常な速さで心臓が動く発作が度々起きていた。そのため、休み時間に友達と鬼ごっこをすることも体育の授業も禁止され、その頃の私は辛く悲しい思いをしていた。早く治ることを望んでいたが、私の住んでいる石垣島では行うことができない高度な治療が必要だった。そんな時、沖縄本島の大きな病院で治療できることが決まった。何度か治療のために本島まで通い、無事手術を行うことができた。今思うと、とても高度で大規模な治療だったことに加え、石垣島と本島との往復も何度もしたため、とても手に負えるような金額ではなかったはずだ。しかし、母は
「０円だった。」
と笑顔で言った。どうやら、治療費は県の制度で、渡航費は市の制度で補助されたそうだ。つまり、すべて税ということだった。私を救ってくれたのは、税だった。誰かが納めた税のおかげで私の命は救われたのだ。
　今だって、税のおかげで元気に生きていられていると考えると、私の中で税へのイメージが大きく変わった。今まで、「納める」行為にしか注目していなかったが、納められた先の税に注目すると、社会の中で大切な役割を担っていることが分かる。例えば、水道工事や学校など、公共のものはすべて税で成り立っている。どれも、私たちの中で当たり前になっているが、これらのおかげで私たちは豊かな生活が送れている。そう考えると、税を納める行為は、「義務」というだけではなく、「誰かへの思いやり」だということに気づかされる。
　次は、私がどこかで苦しんでいる人を救う番である。今は消費税を、大人になったら所得税と住民税も、「誰かへの思いやり」を納めたい。